

紅 土 用

京都大学広報誌 ● 第2号 くれなゐもゆる

KYOTO
UNIVERSITY
MAGAZINE



紅崩

くれないもゆる

KYOTO UNIVERSITY MAGAZINE
京都大学広報誌 ● 第2号
2002年9月

表表紙 附属図書館蔵の近世の京都図をコンピュータ処理によって合成した。原図は上から「細見案内絵図京名所道乃枝折」「天明改正細見京絵図」「内裏図」

裏表紙 京都大学の動き

巻頭対談

① いかにして心を鍛えるのか

ゲスト—ヘンリー・ミトワ

ホスト—尾池和夫

⑦ 心の中の京都大学

ファラシイ・オブ・コンポジション

柿本寿明

創造性とは、伸びやかなチャレンジ精神

塩見弘

⑨ 研究の最前線から

21世紀のイスラーム世界

小杉泰

⑬ たかが学問、されど学問、学問人生の愉しみと面白み。

円山応挙をモデルケースに
美術史学研究方法論の
確立をめざす

佐々木丞平

⑰ 京都大学をささえる人々 志田正雄

⑱ 輝きは躍動から 山下正恵、大西良浩

⑲ 京都大学再発見ツアー— オリンピックオーク 金メダリストの思い出

⑳ 総合博物館のモノ— 唐古遺跡の考古資料

弥生人の声が聞こえる

山中一郎

巻頭

対談

ゲスト ■ ヘンリー・ミトワ

臨濟宗天龍寺僧侶

ホスト ■ 尾池和夫
京都大学副学長



学問をすれば、頭が鍛えられる。運動をすれば、体が鍛えられる。その成果はよくわかるし、

いずれもトレーニングの方法は確立されている。

しかし、「つかみどころのない心という代物はいかにして鍛えるのか」。

日本に生まれ育ち、一九六一年に再来日、

天龍寺の僧侶となったヘンリー・ミトワさんが、

地震学者の尾池副学長と、二十一世紀の心のありようを語る。

尾池 きょうは私は、親父さんみたいな人生の大先輩のお話を、教えを承る立場でお伺いしたいと思います。

ミトワ 地震の話ではないんですか。

尾池 関東大震災ですか。私は関東大震災は詳しいですよ（笑）。

ミトワ 僕は関東大震災を五歳のときに体験しました。

京都大学創設のあくる年、一八九八（明治三十二）年に僕の親父が、水兵で日本にきています。メキシコ湾でアメリカの船がスペインにやられて、それがきっかけで米西戦争がはじまります。アメリカが勝利してフィリピンを領有す

ることになります。そのときに、親父は軍艦に乗って横浜へ寄った。

そのあと日本をブラブラしたと思うんですけども、いつべんアメリカに帰って、二年目の一九〇〇年に日本にまたきています。太平洋側の人間だったら、日本という国はもつと親しかったかもしれないけれども、アメリカ中部のミネアポリスの人間が、汽車に乗ってトコトコサンフランシスコなんかに出でいて、それからまた船に乗って日本にきた。かわった親父だと思つてね。よっぽど東洋が好きだったか、日本が好きになつちやつたのかなとも思います。

それから八年目に新橋の芸者だったおふくろと出会った。だから、こんなごこの馬の骨かわからない人間が出てくるはずですわ(笑)。僕が生まれるのは一九一八(大正七)年です。

親父はユナイテッド・アーティストというのとユニバーサルというのと、二つのフィルムの配給会社の総指令というのか、まとめをやっていたんです。映画がこっちにきますでしょう。それを映画館に配給する、その元締めみたいなのを、十五年か二十年やっていた。それでもって体を壊してしまつて、またアメリカに帰つちやつたんですけどね。

そして、一九二九(昭和四)年のニューヨークの株の暴落がありましたね、世界恐慌ですつかりすつてんになつちやつてね。それから日本にも仕送りが全然こなくなつて、うちの中はガタガタになつた。あとから僕は、親父はどうなつていのかと思つてアメリカに行つたんです。太平洋戦争の始まるちようど一年前です。日本人移民排斥問題が沸騰してしまいました。そして太平洋戦争になつて、日系市民は強制収容所にいれられた。十カ所に一人ずつ、五年間の収容所生活です。僕は五カ所の収容所を経験しました。

命取りの病魔におそわれる

ミトワ 終戦で強制収容所から出てきて、最初は路頭に迷いながらも、より給与条件の良い会社へと十数回、転職しました。冷戦の時代で、宇宙開発も米ソが競争し

いかにして心を鍛えるのか



ヘンリー・ミトワさん

ていました。一九五七(昭和三十三年)ソビエトがスプートニクという人類初の衛星を打ち上げた。それでもつてアメリカがソ連に先をこされたと思つてカッカきたんです。それで当時の政府はソビエトに負けるものかということで、多額の投資をして人工衛星の開発に取り組んだ。

ちようどそのころ、僕はカリフォルニアのジェット推進研究所にはいつて、そこでいろんな開発をしました。

尾池 もともと専門に学ばれたのは、電子工学ですか。

ミトワ 大学は神聖なる場所であり、僕もあこがれていたんですが、その夢も戦争のごたごたで消えてしまった。横浜のセントジョゼフつていう、カソリックの学校出ただけだからね。

尾池 でもお仕事は電子工学。
ミトワ それはね。小さいときからものつくるのが好きでね。趣味なんですよ。

尾池 私もハンダ付けが趣味です。だから小学校のときはそればかりやっていた。鉱石ラジオとかね。それが活きたわけですか。

ミトワ はい。僕がやっていた部門は、ロケットに積む、ものすごい微妙な振動計をつくつていた。

尾池 振動測定は、いまだつたらセラミックですが。

ミトワ セラミックですよ。本当のセラミック、水晶です。

ロケットのあちこちに張りつけておいて、動きを見るわけですね。それがアメリカ時代。三十四、五歳ぐらいまでやりました。金銭欲がたつたのか、体を悪くして、日本に来るようになったんです。

尾池 体を悪くされたのと因果関係があるんですか、日本に来るのに。

ミトワ ロサンゼルスは、なにしろ昔は砂漠のところで、カリフォルニア工科大学のあるバサデナ市の山の斜面に僕らが住んでいて、ロサンゼルスの街が、大分遠いんですけど見えるんですわ。その向こうが太平洋ですね。そうすると、自動車が入つてきて排気ガスがうわーつと、もう見えなくなるぐらい層になつてできるんです。それが海からの風で山のほうに、僕らの家のほうに押しこめるんです。午後になると、排気ガスの雲の中にいるよう。夜になつて温度が下がると、それは山を飛び越えてどこかに飛んでいつてしまふんですけどね。その繰り返しですわ。

もうすごいスモッグでしたね。それで左の肺をやられて、大きな手術して、肺をとつてしまつたんです。それで医者さんが、もうこんなところにいた

らよくない、どこか閑静なところに行きなさいという。

じゃ、体が弱くて仕事もできないし、昔住んでいた横浜に帰ろうと思って日本に戻った。でも横浜は戦争でもってすっかりかわっててね。昔の面影もなくなっていました。で、京都に友達がいので訪ねていつて、それで妙心寺にやっかいになったんですよ。そして妙心寺の古川大航^{かほ}管長が、おまえブラブラしてるんだつたら、頭でも剃れと言われた(笑)。

尾池 よつぽどブラブラしてたんですか(笑)。
ミトワ じゃあそうしようかといって、気楽な考えで得度してしまつてね。

尾池 簡単にいきますね、そのところは。

ミトワ なんていうのかな、自分の人生はそれでもつて終つたような気がしててね。フューチャーがないような気がしてたんです。

サムライとはジェントルマン

尾池 でも日本人だつて、私なんか「おまえ頭剃れ」っていわれて、すつとくもんじゃないと思うんですけども。

ミトワ 親父が残していった本の中に、とっても印象的な本があったんです。肺の手術の前にその本を読んで、「あつ、なるほど、こういうもんかな」というので、日本文化と禅というものに目が開いたわけなんです。

その本の著者は忽滑谷^{かたか}快天^{かいてん}といつて、



■おいけ かずお

1963年 京都大学理学部卒業
1973年 京都大学防災研究所助教授
1988年 理学部教授
1997年 大学院理学研究科長
2001年 京都大学副学長
専攻：地球物理学

■ヘンリー・ミトワ

1918年 誕生。父はドイツ系アメリカ人、母は日本人
1940年 渡米、戦時中は強制収容所でくらす
1961年 カリフォルニアのジェット推進研究所に勤務後、再来日
1973年 天龍寺の平田精耕老師の弟子となり、現在に至る
いけばなインターナショナル京都支部長
京都アスベン協会会長

曹洞宗の坊さんなんです。駒沢大学の総長かなにかやつていた人で、英語で書かれた『レリジョン・オブ・ザ・サムライ』、サムライの宗教という本です。本のサムライというのはジェントルマンだ。ジェントルマンのものと精神は禅だというわけですね。宗教とは言わない、精神的文化だと、それが禅だという。だからサムライイコール戦いではないということを説いていて、なるほど、こういうものかと思つた。

それで禅の先生を探した。ロサンゼルスにいた、本当に乞食みたいな生活をしてた禅の坊さん、その人は、自分は禅の坊さんなんて口に出していませんけれど、それこそボロボロのものを着てね。千崎^{せんざき}如幻^{にょげん}という津軽の人でした。その人のところに年中通つて、いろんなお話を聞いた。日本文化のお話とか禅のお話とか仏教のお話とか。それに僕はすつかりのめりこんでしまった時期があつた。それがもともになつていんです。

仏教の悟りの原点

尾池 京大生はそのほとんどが二十歳前後で入つてきて、修士課程を終え二十五歳前後で卒業する。博士課程なら九年間、人によつてはもっと長くなる。その間、大学は、頭脳のほうは一所懸命詰め込んで鍛えますし、体も一応鍛えます。国立七大学総合体育大会では、京都大学は去年まで三連覇、四年目もなんとかやれと激励して送り出し

たところなんですけれども、体を鍛える課外活動としてはずいぶんあります。あと、課外活動としては、音楽やつたり絵を描いたり、いろんな文化活動もありますね。そういう意味では心を鍛えるということもやつてはいる。だから大学生の生活というのは、本来、頭と体と心と三拍子揃つていることを期待するんですが、偏りもありますね。どうしても頭のほうが中心になりますからね。

ミトワさんは、かねがね、人間には、頭と体と心と三つの要素があるとおつしやつていますが、天龍寺の禅僧の立場から、いまの大学生をこらんになつて、どういふふうになつていきますか。

ミトワ 基礎的にはその三つがうまく具合にバランスがとれていないといけない。頭は大学で学問をして鍛えることができるし、体はトレーニングして鍛えることができるんです。しかし、意識しないかもしれないけれど、精神はどこで、いかにして鍛えるのか。文武に心をプラスしないとダメなと、僕はいつも思うんですけどもね。

別に禅僧になつてやれということまでは言わないですよ。でも心つて難しんでね、つかみどころのないもので、心つてコロコロコロコロしてるから心つて言うという話もありますからね。

つかみようのないものを、いかにつかんで自分のものにしていくか。久松真一先生という人は禅宗だけど禅坊主じゃなかったんです。でも禅のことはものすごく

く詳しい人で、外国人が面会にきますのでしよう。そうすると「How are you?」ってシエイクハンドしますね。そうすると久松先生は「What are you?」と言っんです。そうすると相手は困るわけですね。「How are you?」じゃないんです。「What are you?」なんです。そこが大切だということです。

「おまえは一体なんであるか」と。それを探すのには、僕の考えでは、我々生まれてきて、一体なにをしているのかと。人間というのは一体どこに向かつて行くのかと。ある人は高くて険しい山に登る。すごいアドベンチャーでしょう。太平洋を渡ったりするのもアドベンチャー。研究もアドベンチャーの一つだと思うんだけど、研究室もアドベンチャーの世界です。でも、自分の中身を探すというのが一番最高のアドベンチャーだと思うんですよ。自分は一体なんであるかというのを探すが、一番必要でもって一番すごいアドベンチャーだと思うんです。

仏さんというのは細い目をしてますでしょう。あの目は中に向かつている目なんです。見開いて外へ向かっているんじゃないんです。あれは自分の中を見ている形なんです。というのは、自分は一体なんであるかというのが仏教の悟りの原点、元なんです。これがアドベンチャーなんです。だから座禅していて、そのアドベンチャーにどんどんどんどん入っていく。

最終的にどこへ行くかわかりません

自分は一体なんであるか というのを探すが、 一番すごいアドベンチャー だと思っんです。

よ。それは個人個人の問題だけど、それを禅の世界が言っているわけなんです。それが精神的な根本じゃないか。それがわかる、わかるというのは悟りというのかもしれないけれども、それがある程度わかってからの人生というのと、なにも元がなくて動くのとは、大分人間が違うと思っんです。世の中が全部かわつてくると思っんですよ。

禅の本を読んでいると書いてある。若いときは、山を見たらああ山だ。意識しないけど山だというのはわかりますね。で、ある程度年になると、山を見ても山に見えないんです。ってね。分析してしまうから。バラバラにしてしまうから、山になっちゃわないんです。それを通り越してしまつと、また山が見えてくる。そのとき、本当の山が見えると思っんです。子どもが見た山と同じ山だ。でも途中で見た山は、知識でもってバラバラにしてしまつから、山が山でなくなると。そういうことじゃないかなと思っんだけども、こんな大きなこと言つて、どうもすみません(笑)。

尾池 いや、その見方は学問のやり方と

同じだと思っます。もつ分解していつて分解していつて見るけれども、結局最後は全貌を見ないと意味がないわけです。

医療でも人間の部品を治せばいいというのはいま二十世紀で終わつて、これからはクオリティ・オブ・ライフですね。自分をとにかく高めるための医療。しかも予防する医療でしょう。それが二十一世紀のテーマでしょう。

それから人間を見るといつても、学問というのは十九世紀、二十世紀なんかは主として一般化する、なんでも人間というものを普遍化してしまおうとするんですけれども、それは個別の人にとつては意味ないですよ。例えばお医者さんが「ガンというものはこういうものだ」といくら研究して論文を書いても、私はいつガンになりますかという、それはわからん。このガンはどう治りますかもわからんということ、結局個別はそのまま無視されてきて、統計の中で「ガンというものは」と、こういうふうになつた。二十一世紀はそれじゃだめだということで、個別の世界ですね。一人の人に総合治療をする。教育の問題もそうして、この子を育てるにはどういうふうにやればいいのか。教育論ではなくて、それが学問の世界でいま一番大事で、これからそれをやらなくちゃいけないんです。

「よくみれば」という心の目

ミトワ 昔、お釈迦さんがつぎのよう言っている。二つの手があるんだから、

一つにはめしを持って、一つには花を持ちなさいと。右手に文明を持つたら、左手に文化を持ちなさい、ということ。尾池 技術の発展が急速にはじまつて、文明ばかりがどんどん前にでてきた。

ミトワ 文明と文化が離れていつた。僕が大好きな芭蕉の句で、「よくみれば、薺花さく垣ねかな」というのがあるんです。なすなんつたらんペンペン草でしよう。雑草。そんな雑草を彼が詠んでいるわけですね。だけど雑草を詠んでいるわけじゃないんですよ。「よくみれば」というところに意味があるのでね。「よくみれば」というのを、我々はどこかへ忘れちゃつて。なんでもよく見たらすばらしいものがそこにあるんですよ。その目をあけてもらいたいですね。

おそらくこれは、嵯峨野あたりを芭蕉が歩いてたときに、古い垣根があつて、そこにペンペン草がはえていた。それにぱつと気がつき、「こんなつまらん花でもそこでもって一所懸命咲いているんだな」というようなことがひらめくんでしようね。それでそういう句が生まれた。「よくみれば」という心の目ですね。

尾池 一所懸命見るわけですね。

ミトワ 観察ですね。心ですね。

尾池 「山路来て何やらゆかしすみれ草」というのも芭蕉の句ですね。叡山スミレというスミレの種類があつて、ちっちゃいスミレなんですけれども、峠を越えて「山路来て何やらゆかしすみれ草」と。一所懸命汗かいて峠を越えるだけじゃな

くて、そこでずっとそういうものを見つ
ける。

ミトワ 発見ですね。心の眼ですね。

尾池 観察力というようなものじゃなく
て、やっぱり愛情ですかね。ものに対す
る、地球に対する。

ミトワ そうですね。一所懸命とるん
ですね。そこから、なにかが芽生えてく
るんだからね。

尾池 学問の世界も同じです。学生に教
えるのはそういうことで、なんでもええ
から見とけと。結局、観察へいくんです
かね、文化だ、文明だ言いながら（笑）。
なんでも一所懸命見ろって。

ミトワ さらに言えば、ただ見るだけじ
やなくて、それを心にとめないよね。

三角を書きましてね。三つのところに、
ラブ、トウルース、ビューティ、その三
つはどこへ転がっても、ラブがあつたら
ビューティとトウルースがあつて、トゥ
ルースがあつたらビューティとラブがあ
る。どつちを焦点にしても、この三つが
関係してくると。この三つが揃ってない
と、なんか完成してない。二つではバラ
ンスがとれないわけですよ、プラスマイ
ナスだけでは。もう一つなければ。とい
うことを僕は言いたいんですけどね。

一つあれば、あとの二つはどうしても
くつついてくるわけです。だけどそれ
を見逃すか見逃さないかですね。僕は大学
へは行ってませんからわからないけど、
そういうことは課目にはならないでしょ
うけど。

せつかくこの世に
生まれてきたんだから、
なにかひとつぶつかってみよう。
その意欲がほしいですね。

尾池 でも、なんとなくそれが身につ
て、そういうことがわかつて卒業して
いくというのが大学の役割だと思つて
いるんです。いかにしてそういう見方
ができるようにするかというのが、大
学の実践なんです。

京都の近代化と疏水事業

尾池 国際化、国際化とさかんに言われ
る。当然、我々もしなきゃいけないん
ですが、へたに国際化すると、個性がな
くなって平準化してしまう。でも、国際交
流というのは、大いに進めなきゃいかん
です。

ミトワさんは京都アスペン協会の会長
なんです。疏水の話がきっかけとなつ
たアメリカのアスペン市との交流です
が、いつ頃から始められたんですか。

ミトワ アメリカのコロラド州のデンバ
ーからロッキー山脈に入る所に、アスベ
ンって町があるんです。海拔二千メー
トルで、三日いたら息が苦しいですよ。そ
のくらい空気が薄い。

いまは高原のリゾート地として知ら

中を行つたらいいんですよ。それでアス
ペンで水力発電所、まだ幼稚なものだつ
たんですけども、銀山に電力を送つて
いた。それを見てきて、これを蹴上につ
くろうという案を出したんですね。

政治的、金銭的にいろいろ困難があつ
たそうですけれど、一八九〇（明治二十
三）年に疏水は完成し、翌年、蹴上に日
本最初の水力発電所が完成した。一八九
五（明治二十八年）年には、日本初の市電
が走り出す。

水力発電所が、日本で一番先に京都に
できた。そのもとがアメリカのアスペン
にあるんだ。だから僕は京都アスペン協
会というものをつくつたんです。

尾池 行き来はあるんですか。

ミトワ ええ。五、六人で見学に行つた
ことがあるんです。もう三年ぐらいたつ
かな。ベネト市長さんの次のレイチェル
さんという女の市長さんが京都にきたと
きには、蹴上の琵琶湖疏水記念館なんか
見ていただいた。その人が帰つたあとに、
アスペン市から表彰状がきましたよ。そ
んなものももらつているし、歴史的に大
切なものだから、しつかりやらなきゃい
けないと思つてやつているんだけど、僕
一人の力ではどうにもならない。

京都の人にはそういう歴史を知つても
らいたい。尾池さんに会長になつてもら
おうかな（笑）。

尾池 電車はまだ復活させようという話
もあります。最初は七条付近から伏見の
下油掛の間を走つたんですね。そのとき

の電車というのは、夜になったら提灯持った人が電車の前を走っていたとか(笑)、電車の前を人が警告しながら走っていたという話を聞きますね。

ミトワ そのぐらいゆっくり走ってたんですね。

尾池 琵琶湖は活断層運動で落ち込んだ盆地ですし、京都も活断層運動でできた盆地なんです、その高低差がね。

ミトワ あるんですよ。その高低差を使って水が来るんです。

尾池 いま運搬や発電には使っていませんが、飲料水としてはずっと使っていますね。それと、例えば京都の文化財を守るために、疏水の水を地下にひいておいて、大地震が起きたときには、自動的にお寺なんかに水をかけて火事から守ろうと、そういう壮大な計画があります。

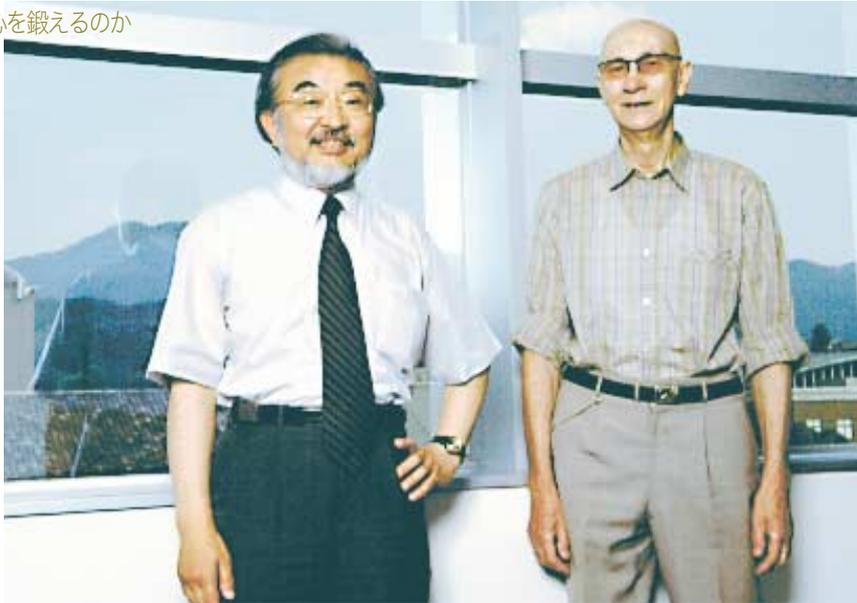
ミトワ ということは、京都市内にも高低差があるわけですか。

尾池 はい。何十メートルか。京都大学の地面と南のほうの東寺のてっぺんと標高は同じぐらい。それぐらい坂になっているんです。

ミトワ 天龍寺から見ても、京都タワーが下のほうにありますもの。

尾池 その高低差を利用して、いろんなことができるというのがあって、琵琶湖疏水というのは、琵琶湖からひいた水で発電をするという、京都の近代化の歴史ですね。発電は確かに歴史の話ですが、疏水自身はまだまだ未来が続いていく歴史ですね。

巻頭対談 いかにして心を鍛えるのか



研究も禅も奥が深い

尾池 いまの若者、どのように見えますか。それと、若者に期待すること。

ミトワ その話はね、ギリシャ時代から、老人は若者に文句言ってるんだよね。あの当時だって「いまの連中はしょうもない」って言うてるんだから。いまと同じ。これはかわらんと思うのよ(笑)。だから、その前の自分たちはどうだったんだと思えばわかる。「盛年 重ねて来らず」(陶淵明)ですから。歴史は繰り返す、だね。

尾池 京大に対する注文なりなんなりがありましたら、ぜひ伺いたいんですが。

ミトワ そんな注文なんてつけられないですよ。難しいです、それは。

尾池 百年たつたところで、これからの第二世紀に、法人化してガタガタするんですけど、一体どうすりゃええかなと、我々もちょっと迷うところもありますね。でも総合博物館もできて、研究成果をお見せできるようになってきました。

ミトワ そういうことがいいんじゃないですか。皆さんに来ていただいて、見ていただいて、そういうところから始まると思いますよ。急に「こうしなさい」なんていう問題ではないと思うけど。

尾池 意識的に努力しないとできないと思いますけどね。

ミトワ 開かれた京大ね。お寺さんもつと開かなきゃいかん。

尾池 お互いにもつと開いて(笑)。

ミトワ でもね、あんまり開かれるとね、

おもしろいもんで、人間って明るくなつたところよりは、ちょっと薄っ暗いところのほうが興味がわくんですよ。そう思わない?(笑)

まあ、研究室は見えないからいいかもしれない。お寺さんもお庭だけ見えるぐらいがちょうどいいのかな。

尾池 研究の途中というのは本人もわからない。禅僧もそうかもしれないね。道を求めて一所懸命やっているけど、自分も見えてないわけだから。

ミトワ お互いに同じようなもんですね。

尾池 だから、見せろというほうが無理だと思っておるんですけどね。やっぱり研究も薄暗いところでやっていますからね。

ミトワ わからない面があるからこそ、人間が解明に向かっている価値があるの、なにもかにもあからさまだったら、なんにも楽しめないと思うんだ。

尾池 よく見えないけれども、中身は本物じゃないといけませんよね、お寺でも大学でも。

ミトワ そうそう。だから奥が深いわけですよ。いくら行っても終わりが無いというのと同じです。研究もなにやつても終わりが無い。だから入ってみなさいと。ぶつかってみると、せつかくこの世に生まれてきたんだから、なにかひとつぶつかってみよう。Boys, be ambitious! ですね。その意欲がほしいですね。

尾池 でも、そう簡単に入れるところでもない。禅寺なら水をぶっかけられるかも(笑)。

私が京都大学に入学したのは六〇年
安保の年、卒業したのは東京オリ
ンピックの年で、日本経済が「所得倍増
計画」の下で高度成長路線を邁進してい
た時代です。中卒や高卒は「金の卵」と
呼ばれ、大卒も完全な売り手市場であつ
たため、学生時代にあまり勉強した記憶
がありません。因みに、当時の教科書や
参考書でいま手元に残っているのは、サ
ミュエルソンの『エコノミックス』一冊
のみです。いまや表紙はぼろぼろで、中
身の紙もすっかり黄ばんでいます。四
十年前、ゼミの部屋で、インクの匂いの
する真新しい本のページを開いたとき、
経済学部の学生であるという実感が湧い
てきたことを懐かしく思い出します。

『エコノミックス』の内容はほとんど忘
れてしまいましたが、唯一覚えている専
門用語が「フアラシイ・オブ・コンポジ
ション」（合成の誤謬）です。サミュエ
ルソンは、「経済の分野では、個々にと
って正しくみえることは、全体にとつて
は必ずしも正しいとは限らない。また、
その逆もありうる」と説いています。こ

フアラシイ・オブ・コンポジション

柿本寿明

(日本総合研究所理事長)

の言葉は経済というものの複雑さ、面白
さを象徴するものとして、私に鮮烈な印
象を与えてくれました。

卒業後、住友銀行に就職し、銀行員生
活の約半分を経済調査部で過ごしまし
た。日本総研に転じてからはシンクタン
ク部門を担当し、通算二十年余りにわた
ってエコノミスト稼業に携わってきまし
た。この間、常に私の念頭にあつたのが
「フアラシイ・オブ・コンポジション」
です。経済予測に当たっては、単に統計
数字を解析し、マクロモデルを使ったシ

ミュレーションを行なうだけでなく、産
業界の動向、個別企業の戦略、消費者の
ビヘイビア等、ミクロの情報をつぶさに
分析し、マクロの動きとの整合性を高め
るように努めました。一方、ミクロの単
純な積み重ねがそのままマクロの動きに
結びつくわけではないという点にも留意
しました。この言葉に出合ったことで、
今日の私があるといえるかもしれませぬ。

遠隔講義の第一回目を担当

卒業して四十年。その間、京都大学を
訪れたことは数えるほどしかなく、特に
ここ十年余りはご無沙汰しておりまし
たが、先日、テレビのモニター画面を通
して、新しい教室の様子や学生さんの勉
学振りを拝見する機会を得ました。

今般、京都大学は東京の帝国ホテルの
一室にリエゾン・オフィスを設け、東京
と京都の教室をテレビ会議方式で結んで
遠隔講義を行なう新しいシステムを導入
しました。本システムの導入を推進した
経済学部が、その第一号講座として、「シ
ンクタンク論」（半期、二単位）を本年

四月からスタートさせることになり、日
本総研に講師派遣の要請がありました。

第一回目を私が担当し（二回目以降は

いろいろな専門分野の研究者が交替で担
当）、シンクタンク業界の現状や日本総
研の経営理念、活動内容等をお話ししま
した。私の顔は経済学部の大会議室のス
クリーンに映し出され、大会議室内の様
子は東京のモニター画面で見ることがで
きます。このシステムの最大のメリット
は双方向での情報交換にあり、一時間の
講義の後、三分の質疑応答の時間が設
けられています。講義が終わるやいなや
学生さんからの射た鋭い質問が続出
し、その意欲と向学心に感服しました。

大学の独立行政法人化や「トップ三〇
プログラム」で、大学にも競争原理が導
入されようとしております。いかなる事
態になろうとも、京都大学の自由と創造
性を尊重する学風に加え、新しい試みに
積極的にチャレンジされる先生方と意欲
あふれる学生さんの力をもってすれば、
二十一世紀の京都大学がますます発展す
ることは間違いないと確信いたします。



東京の帝国ホテルにあ
る、京都大学のリエゾ
ン・オフィスから遠隔
講義をする柿本氏(右)
日本経済新聞提供

■かきもと としあき

- 1964年 京都大学経済学部卒業
株式会社住友銀行入行
- 1989年 同行取締役経済調査部長
- 1991年 同行取締役人形町支店長
- 1993年 株式会社日本総合研究所
専務取締役
- 1998年 同社副社長
- 2000年 同社理事長



学生時代、研究室の仲間と北海道大学での学会に参加した後。右端が大志を抱く筆者

ジ

ヤックは牛を売るために、市場に出かけました。しかし途中で、豆とその牛を交換してしまいました。

Q—①貧しいヤックはどうして牛をもっていたのでしょうか？ ②ヤックはいかにして豆に牛と同じ価値を見いだしたのでしょうか？ ③親、まわりの村人たちの反応を想像すればどうして勇気をもって交換できたのでしょうか？（なにも考えていなかったのでしょうか？）

A—ヤックは、京都大学で学びました。

研究室、クラブの部室、大文字山の上、行きつけのお好み焼き屋と、一人で考え、また友と話し合いました。時間は無限にありました。最近はお腹が出てきたヤックも、当時は、やせていました。精神という牛はまるまる

太つてきていました。そして、自由のなかで、自分の目で価値を見いだすことができるようになり、また見えぬものを具体的にみることで、はじめてチャレンジが可能になります。あとは勇気をもって決心するだけです。

京大の伝統である、創造性と

はまきしくチャレンジ精神です。

社会に出て、ダイヤモンドの研究に専念している間、欧米では学生時代に研究していた炭化珪素(SiC)半導体の実用化が進んでいました。SiC半導体を用いれば、電気回路の電力損失を百分の一以下にできます。エネルギー源の八十パーセント以上を海外に頼っている日本の命運がかかっている重要な材料です。実はこの材料は、恩師、松波弘之先生(本学、工学研究科教授)が三十年近く前から研究され、学問的には世界をリードされてきました。しかしながら、実用化の面で日本の産業界は遅れをとり、大学時代の研究した者としては歯がゆく思っており、事業計画を立案して一九九六年に、社内ベンチャー制度に申し込みました。しかしながら八〇年代末に立ち上がったアメリカのベンチャー企業が躍進しており、当時でもすでに不動の地位を築いているようにみえました。

夢と情熱で起業

事業計画の提出から一年ほどたったころスタンフォード大学の今井賢一先生と同窓会でお会いしました。SiCの可

創造性とは、 伸びやかなチャレンジ精神

塩見 弘

(シクスオン取締役)

京都工芸繊維大学教授)にご指導頂き、工芸繊維大学の地域共同研究センターで起業しました。長年経験を積んできた分野で確立したシーズを目の前にあるニーズと結びつけて起業される例は多いとは思いますが、しかし我々はSiC半導体を実用化して、省エネ社会を実現するという夢と情熱だけで、文字通りSiC半導体の結晶のシーズ(種結晶)を作り出すという研究開発からのスタートでした。

SiCという豆(シーズ)に価値を見いだし、豆をまいて、懸命に世話をした結果、四年たった現在、大学から、ビジネスという雲の上に伸びる大きな豆の木が育ちました。

さあ、木を上り、戦いに勝つて、金の卵を産む鶏を獲得しなければなりません。金の卵とは、持続可能な社会を保証する省エネシステムであり、それを生み出す鶏はSiC半導体です。

戦いはこれからです。最初は一人が行なった「交換」でしたが、今はいっしょに木を上って戦ってくれる仲間が増えていきます。

是非、仲間に加わってください。伸びやかな精神で突き抜けていきたいと思います。

- しおみ ひろむ
- 1975年 京都大学工学部電気工学第二学科卒業
- 1977年 大学院工学研究科修士課程修了、住友電気工業株式会社入社
- 1993年 スタンフォード大学工学部材料工学科博士課程修了(Ph.D.取得)
- 1998年 株式会社シクスオン創設

イスラーム人口は、現在およそ十二億人、世界人口の五分の一を超える。二〇二五年には、四分の一を超える」と予測されている。グローバル化によって一体化しつつある国際社会において、イスラーム世界は大きな位置を占めている。日本にとっても、国際社会全体にとっても、イスラーム世界との相互理解は重要な課題となっている。

国際機構としてイスラーム世界を代表するOIC（イスラーム諸国会議機構）には、五十六カ国・一地域（パレスチナ）が加盟している。イスラームは東西に大きく広がり、多様性に富むさまざまな民族や文化を包摂している。しかし、その多様性と同時に、イスラームによって全体を通底する統一性を保っているのが不思議である。イスラーム世界の固有性や独特の世界観は、一九七〇年代末から次第に知られるようになってきた。

アジア・アフリカ地域研究研究科では、アジア、アフリカの諸地域を研究しているが、その一環としてイスラーム世界論を展開している。イスラーム学や人類学、社会学、宗教学、その他の専門領域を合わせながら、総合的地域研究の方法を駆使して、イスラーム世界の真相を解明するのである。ここには、地域研究の醍醐味がある。

二十一世紀のイスラーム世界

研究の最前線から アジア・アフリカ地域研究研究科

（アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

小杉 泰

急速に進みつつあるグローバル化によって、世界は次第に狭くなっている。しかし、コミュニケーションが増大するだけでは、必ずしも相互理解が進むとは限らない。世界のさまざまな地域には固有の文化や生活があり、それぞれに独自の論理が展開している。「国際標準」が広がって地域の差がなくなりつつあるように見えながら、実は深層では固有の世界観がいつそう深く根を下ろしていくということも起こる。ここに、現代の国際社会の難しさもあるし、

地域研究を推進する意義もある。

日本でのイスラーム理解の進展

二〇〇一年九月に米国で起こった「同時多発テロ」事件では、国際的な文化摩擦が劇的な形で現われた。さらに、米英軍による「報復」的なアフガニスタン攻撃によって、イスラーム圏でも市民レベルの犠牲者が増大した。これを見て、「文明の衝突」がいついかにここまで深刻なものとなったか、と危機感を覚えた人も多くいる。イスラーム世界とアメリカはこれほどまでに、抜き差しならない対立をしているのか、と。

しかし、欧米と日本を比べると、イスラーム世界に対する認識は大きく違っていた。ヨーロッパやアメリカでは、アラブ系、中東系の移民（すでに長年定着している人も含めて）に対して警戒心が高まり、差別的な扱いも生じたが、日本ではイスラーム諸国からの訪問者に対して深



■ **こすぎ やすし**
1983年 エジプト国立アズハル大学イスラーム学部卒業
1984年 国際大学大学院助手
1985年 国際大学中東研究所主任研究員
1986年 流砂海西奨学会賞受賞
1989年 国際大学大学院助教授
1996年 サントリー学芸賞受賞
1997年 国際大学大学院教授
1998年 京都大学大学院教授
日本中東学会・日本比較政治学会理事
専攻：イスラーム学、中東地域研究、比較政治学

刻な軋轢は生じなかったし、むしろイスラーム世界との相互理解の必要性が強調された。「これまでイスラームの世界について知らなすぎたのが問題だ」という論調が目についた。

実のところ、日本でのイスラーム理解は一九八〇年代から九〇年代を通して、大きく進んでいる。昨今の「知識が不十分」という認識は、きちんとした反省ができるほど認識が進んできたことを反映しているのである。二十〜三十年間にイスラーム理解が改善したことへの証左は、「呼び名」の修正によく示されている。

二昔前には、イスラームを「回教」と呼ぶことは珍しくなかった。これは、ウイグル族（回纥の宗教、との中国での誤解から生まれた誤称が日本に伝わったものである。「マホメット教」は欧米での誤称が起源であるが、イスラーム側では長年「ムハンマドを訛ってマホメットと言うべ

きでないし、そもそも私たちは彼を拜んでいるわけではない」と反発してきた。信仰対象の唯一神アッラーについても、かつては「アラーの神」という、いかにも多神教的な表現が使われていた。ところが現在ではこのような誤称は影をひそめている。聖典も「コーラン」から「クルアーン」へと改められつつある。主要な名称で訛音が残っているのは、聖地のメッカ、メディナ（正しくはマッカ、マディーナ）くらいであろう。人間関係でも、他人を知ろうとすれば本人の自称を尊重するのは当然であるから、これらの呼称の改善が見れば日本でのイスラーム理解が適切に深化していることがわかる。

イスラーム世界との邂逅

日本のイスラーム世界との交流史は意外に浅い。日本がイスラーム世界を強く意識するようになった世界的な事件は、一九七三年の第四次中東戦争、それに続く第一次石油ショックであった。このときは、「アラブの大義」を理解しない国には石油は売らない、と言われて衝撃を受けた。そのため大事なことはアラブ諸国との友好だと理解した。「アラブの大義」とはパレスチナ問題への取り組みのことであったが、当時の中東ではすでにイスラーム復興が進みつつあり、「アラブの大義」も民族主義というよりは、アラブ・イスラーム共通の大

義に変わりつつあった。

イスラームが前面に出てきたのは、一九七九年にイラン・イスラーム革命が起きたときであった。古参の産油国であるイランでの動乱は第二次石油ショックを生み、「宗教による革命」は日本は言うまでもなく、全世界から驚きをもつて受け止められた。イスラーム政治に対する研究が本格化したのは、この年以降のことであった。実のところ七九年に起こったのはイラン革命だけではない。ペルシア湾の対岸にあるサウディアラビアでも大きな政治変動があった。十一月には聖地マッカ（メッカ）で反体制派の武装蜂起があり、十二月には東部州で住民反乱が起こった。

た。東部州はシーア派住民が多く、明らかにイラン革命の影響が感じられた。さらに同じ頃、イランの東隣のアフガニスタンでは、ソ連軍が侵攻して親ソ政権を守ろうとしたため、ムジャーヒディーン（イスラーム・ゲリラ）の闘争が始まった。これらの問題は、その後、湾岸戦争や現在のアフガニスタン問題にまでつながっていく。

このような大きな変動のなかで、イスラームにおいては宗教と政治が、分かちがたく結びついていることがわかった。それはなぜなのか、と誰もが疑問に思った。この問いに答えることは、最初は簡単ではなかった。私たちはつい、近代化が遅れてい

「政教分離」が実現できていない、というような安易な答えを求めがちである。しかし、どの社会にも固有の文化があり、それを無視して外側から解釈を押しつけても、本当の理解にはたどり着かない。

政治と宗教を分けない考え方を「政教一元論」というが、これは「政教一致」のことではない。イスラーム世界では社会認識の形が西洋とは異なっており、そもそも政治と宗教の違いを主たる問題と考えないのである。これは、私たちが温度によって「水」と「湯」に分けて考えるのに対して、イスラームでは温度にかかわらず「マー（英語ならば water）」と一括しているのと似ている。対象



2000年6月に、トルコからの職人と日本企業との共同作業で建築された東京ジャーミイ（モスク）。新宿の超高層ビル群にほど近い東京・代々木上原の住宅街の一角にある。ドームの高さは23メートル、トルコ様式で装飾された本格的なモスクで、礼拝の指導者がすわる説教台ミンバル（下の写真）にも、細工がほどこされている。イスラーム文化を伝えるために、ムスリム（イスラーム教徒）以外の見学者にも開放されている
写真・柴永文夫

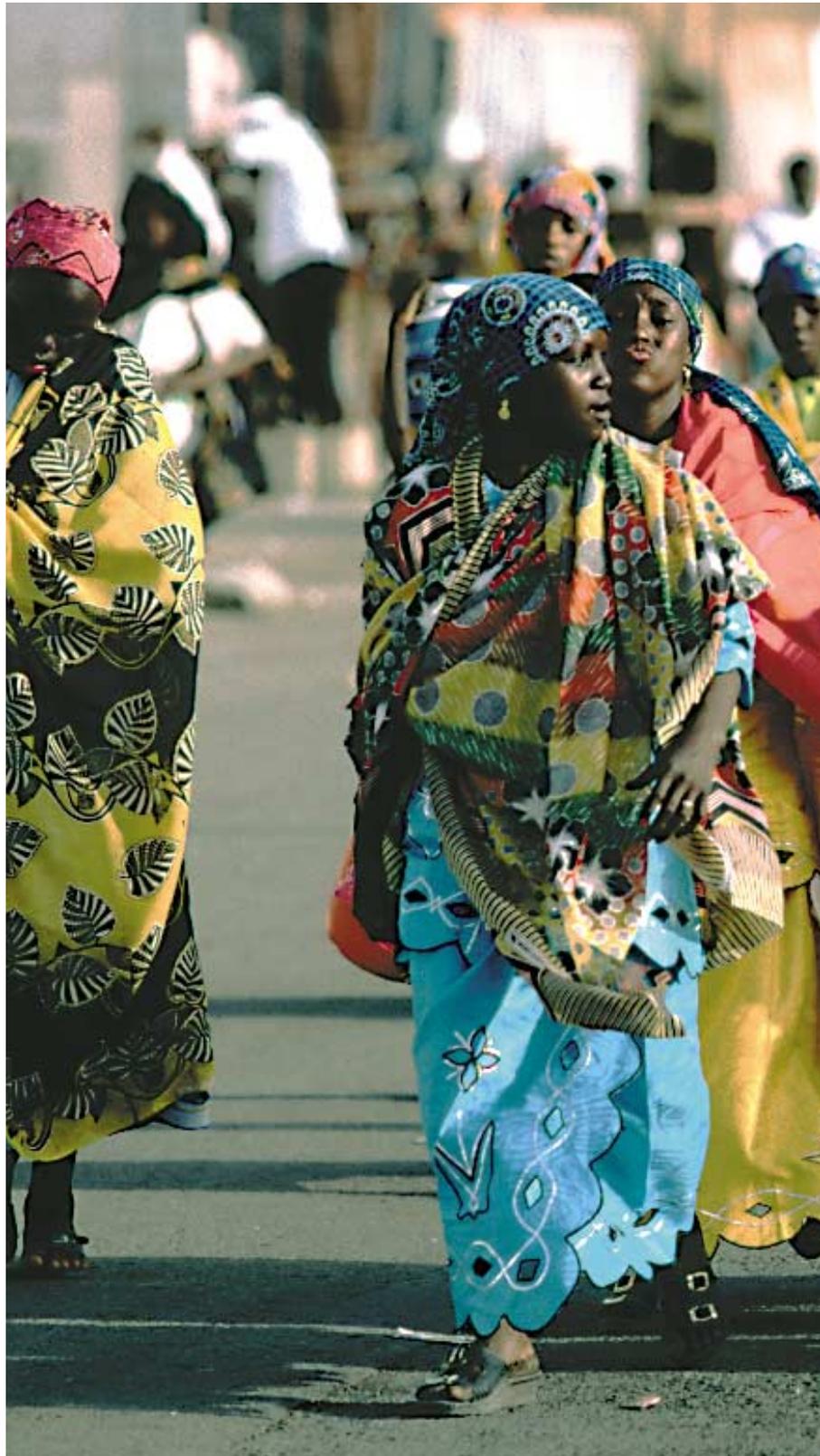


イスラームに帰依する人々は、神の定めにしたがって、できるならば一生に一度、ハッジと呼ばれる、聖地マッカ（メッカ）の巡礼におもむく。近年では、世界各地から200万以上の巡礼者が集まる。西アフリカからの巡礼団はカラフルで、イスラームが包摂する世界の多様性を語っているかのようである
写真・野町和嘉

をどう捉えるかという基本が異なっている。政治と宗教の代わりに、彼らは法と共同体の識別を重視する。

ここでは、イスラーム法が人間の共同体（および国家）を縛るか否かが焦点となる。イスラーム法が共同体に優越して、国家を規制すべきである、というのがイスラーム革命の理論であった。その意味で政教一元論は、けつして前近代的な政教一致をめざしているわけではない。その点がわからないと、イスラーム世界が何を求めているのが理解できないことになる。

日本は古くは中国や朝鮮から、近くは欧米諸国から文明を学び、他の世界的な文明を理解し、その長所を学ぶことに長けている。しかし、イスラーム世界はこれまで知っている



が必死で守っているからではない。確かに、啓典クルアーンの教えは彼らにとつての原点である。しかし、それだけならば、現代的なエネルギーは出てこない。啓典を参照しながらも、彼らがいつも時代に合った解釈というものを現実の社会において求め続けているから、バイタリティーが生まれるのである。そして、解釈の革新が続いているから、フィールドに向かうたびに、新しい発見がある。

「イスラーム世界」という存在自体、百年前には、西洋列強の植民地支配のためにほぼ消滅しかかっていた。それを、新しい形でよみがえらせて、現代の国際社会における実在としたのは、一世紀以上におよぶイスラーム復興運動の成果であった。そうした運動のなかには、ときには急進派や武装闘争派も登場するが、主流はもつと地道な活動を続けている。

たとえば、日々の暮らしのなかで、イスラーム的な相互扶助の精神をいかに実現するか。利子を禁止する教えを守って、リスクと利益を共有する経営原理で「イスラーム銀行」を運営することはできるか。宗教を紐帯とする国家連合であるイスラーム諸国会議機構が、いかに非イスラーム諸国と対話をすべきか……このような設問に答える実践こそが、現在のイスラーム世界を動かしている。

どの文明圏とも違っており、全く異なる類型として、その特質の解析には時間がかかる。欧米の研究とは違って、日本には歴史的な確執やバイアスはなく、その分だけ平明かつ公平に見られる利点はあるものの、イスラーム世界の研究は自分のあいだ大きな課題であり続けると思われる。

イスラーム世界を学ぶ知的楽しさ

アジア・アフリカ地域研究研究科は、アジアとアフリカに属する諸地域を研究することを責務としてい

る。私たちのおこなう地域研究を「総合的地域研究」と呼ぶが、この「総合的」とは、グローバルな視野に立ちつつ地域の固有性をきちんと位置づけること、地域を総合的に理解するために、人文・社会・自然の諸科学を融合していくことを意味している。地域研究は一般に、人文・社会科学を中心とした分野と見なされているが、自然科学の専門家も多く参加して「文・理融合」をおこなうのが、京都大学の地域研究の特色となっている。

この研究科はいわゆる「独立大学院」であるが、従来の科学の枠を離れて学融合的な研究をおこなうことが、独立していることの目的である。もつとも、「学融合」とは美しい言葉であるが、それほど容易なわけではない。どのようにして諸分野が融合しうるのか、という質問はよく受ける。私たちの答えは、研究者一人一人が「ルツボ」の役割を果たすということであるが、ルツボには加熱装置が必要である。その役割をするのがフィールドである。現地調査と

いう言葉もあるが、私たちはフィールドワークを「臨地研究」と呼んでいる。地域研究は、地域の現場に臨んで、「知のルツボ」としての自分を思い切り加熱しなくては成り立たない。

イスラーム世界をフィールドにして三十年ほども暮らしてきたが、いくらやっても知的な刺激は尽きない、と今更ながら思う。イスラーム世界は変化し、思想も社会活動も発展を続けている。このバイタリティーが出るのは、七世紀の教えをみな

円山応挙をモデルケースに 美術史学研究方法論の確立をめざす

—— 絵画を鑑賞する、というのはわかるんですが、絵画を研究する、というのはどうということなのでしょう。美術史研究の目的は何でしょうか。

佐々木 絵画を鑑賞するにも無知識であったり、美の本質を理解していなければ、真に味わえるものではありません。

絵画を研究するということは、そうした鑑賞のためにも、より深く作品を理解できるベースを作ること、様々な知識を得、考察を進め、解析することと意味します。

絵画というものは、描かれたモチーフの構成や技法の持つ美しさから、描かれた内容やその意味、あるいは文化的背景や時代性、国民性まで、様々なものを内包しています。

絵画を鑑賞するということは主観的な行為ですが、その主観的な行為を行う際には客観的な絵画に対する理解が必要だと考えています。

言いかえれば、絵画という感性の領域のものであっても、作品を理解するためには客観的な作品成立の背景への理解や把握が必要ということ。私の美術史研究の方法では、絵画表現を水面上に出た氷山の一角と捉え、水面下に隠れて見えないより大きな部分の持つ意味をも含め全体像を解明しようとするものです。

つまり水面上の絵画は画家個人の絵画思想を通して表現されたものですが、画家がそのような表現方法を取り、考えを持つに至った基盤としての時代性、社会的文化的背景までを解明しようとするのが私の美術史研究の目的です。円山応挙研究はそのモデルケースです。

時代精神を読み込む

—— 氷山と捉えることが美術史学の使命であることがわかりました。具体的に円山応挙の制作の場合に即していつ、



佐々木丞平

大学院文学研究科(文学部)教授に
学問観・人生観を聞く

どうなるのでしょうか。

佐々木 応挙の作品を見ると、従来の表現とは異なっており、客観的な、つまり写生表現を用いています。それまでは、画家の所属する流派の作風や画家個人の個性を表現することが絵であるという考えが一般的であったわけですが、応挙は制作者の主観の主張よりも自然物そのものの持つ美の方を重視したわけ。こうした客観的表現を推し進めるためには対象物の形を立体的に把握し、形の基本構造を理解した上で、そこに自然物の持つ生動感を再現しようという、これは、日本絵画史上では百八十度の大転換ともいえる考え方なんです。

応挙の写生表現を水面上に出た氷山の一角と捉えると、応挙にこのような表現方法を生み出させたものは何であるか、ということが水面下の要因となるわけ。こうした絵画思想の大転換は応挙一人がしたことでありま

江戸時代中期の画家、円山応挙を研究。応挙は絵画に遠近表現、量感表現をとり入れ、写生的態度で作品を描いたことで知られる。

人間の精神活動のひとつである芸術を社会とのかかわりのなかに位置づけるところに、先生の研究の特色がある。

応挙の出現は、モノの見方に百八十度の転換をもたらしたそうだ。

その転換は、時代の精神と密接に関連していることが解き明かされる。

また、応挙の精神は現在にも引き継がれている、といわれる。

応挙が常に持ち歩いていた写生帳。写生をする時に、単に物の形を写すだけでなく、その構造を理解しようと努めていたことが確認できる
円山応挙筆「写生雑録帳」(佐々木丞平編著『応挙写生画集』講談社、1981年)より転載

■ささき じょうへい
1965年 京都大学文学部卒業
1970年 大学院博士課程修了
1972年 文化庁文部技官、調査官
1981年 京都大学助教授
1991年 京都大学教授
1997年 国華賞受賞
1999年 日本学士院賞受賞
2000年 フンボルト賞受賞
附属図書館長
専攻：美学、美術史学

すが、応挙にそう考えさせた時代というものの力を無視することはできません。江戸時代中期という時代性、それが水面下にある社会的文化的背景の部分です。

—百八十度の大転換は、何故ほかならぬ十八世紀、江戸時代中期に起こったのでしょうか。

佐々木 私は社会の成熟の過程に注目しています。文化が未成熟な時代では人々は生き抜くだけで精一杯であり、文化文明の構築への発想すらわからない状況にあります。

社会秩序が安定して初めて人々は、様々な物事に関心が向かう余裕が出てくるわけです。リンゴが落ちてくるのを見て、食べ物が落ちてきたとだけ考える時代から、リンゴは何故落ちるのだらうと、引力に気が付く時代までの変化は、ひとえに社会の成熟の度合いにかかっています。

不思議なことに、洋の東西を問わず、十八世紀というのは社会の成熟期なんです。人々の好奇心や知識欲を刺激することが社会現象として起こるわけです。辞書が出てくるのもこの時代で、知識の整理が進み、啓蒙の時代でもあったわけです。例えていえば、ただ綺麗なた花といっていた時代から、何という名前、どの季節にどの地方に咲き、葉効もあるなどという知識を整理し、理解する時代に入ったということです。

こうした社会現象は視覚芸術に携わる人間にも大きな影響を与えないわけはありません。人々が知的理解を以て

描かれた花を見るのであれば、その視線に耐え得る絵画表現が必要となるわけです。その一つが応挙が生み出した写生画であるといえるのです。

応挙は鳥など側へ近寄つたら逃げてしまう生物を観察するときには、当時発明されていたレンズを使った単眼鏡を用い、あらゆる方向から観察して鳥の体の構造を理解してから描こうとしています。

単眼鏡と応挙の写生画という、江戸中期にいずれも新しく生み出されたものがお互いに係わり合っていく。こうして考えてみると、芸術表現は社会的産物であるといえるかと思えます。当時の知的連鎖の跡をたどることで、研究していく側もその知的刺激の連鎖の中に加わるところが芸術研究の面白さであるかもしれません。

自然科学者に触発される

—先生がこの学問の世界に入られるようになったきっかけについて教えてください。

佐々木 文学部に入った頃は色々なことに関心がありました。音楽、西洋文学、哲学、等です。美術史研究を選んだのは先生に勧められたことでした。ある時、数学者の書いた本を読んだ、異分野であるのに根底には学術研究としての共通性があることを感じました。それは芸術の把握と同じようなセンスに裏打ちされていたのです。数学とか科学とか、自分の専攻と対極にあると考えていた学術分野の先生



方が、気を付けているとよく同じような発言をしておられることに気付いたのです。それは完成度の高い数式だとか、理論だとかには美しさがあるという事です。完成された究極の世界に生み出される美、それが数学や化学という分野において認識されているというところに大いに触発されたんです。

ではその美というものは何なのか、人間は何故それに美を感じるのか、考察してみたいと考えたことが本格的に美学美術史学に取り組みきっかけとなったと思います。

当時の学生は西洋の文化に関心を寄せる者が多かったのですが、美というのは精神文化形成の結果で出てくるもので、正確に深く把握するためには自分としては身近なものから美を捉えたかったのです。それで日本絵画の研究を選んだのです。当時は一方では近代への懐疑を意識した唐木順三（京大出身

の哲学者）の「中世」とか「無常」などの考え方が新鮮に感じられ、この影響も受けたかもしれません。

——先生がおっしゃる「身近」とか「近代への懐疑」とか、現在ではあたりまえのよつな言葉ですが、しかし、四十年前ほどの思想の主流の問題意識は、マルクス主義を含めて封建的残滓をもつ「日本の近代」をどうするかであり、先生のようなスタンスの方は少なかったと思いますが。

佐々木 そうですね。少数派だったでしょう。

作家の主體の眞の意味

——絵画を研究するにあたって、大事なことは何でしょうか。

佐々木 美術史研究の方法論には幾つかありますが、絵画を理解し、鑑賞するのは自分であるから、自分がどう見るのか、感じるのが重要だとする解釈学的傾向が多分現代では

主流になっています。

私はそういう立場はとっていません。私の研究対象は近世絵画史ですが、自分がある絵画に非常に感銘を受けたとしますと、何故いい絵だと感じるのか、美的価値は何処にあるのか、という問題と同時にこの作品を画家は何故描いたのか、何を訴えかけようとしたのか、ということを考えます。作品の背後には必ず画家という人間の存在があります。画家の考え方にできるだけ即してその時代の目で探求することが絵画理解のベースであり、客観的研究方法であると考えています。

制作者本人の作意に反して、画家がどう考えようが自分はこう解釈するという立場はとりません。画家とその作品を切り離し、作者不在で自分の主観を重要視するのなら、それは美術史研究ということでもなくともよいのではないのでしょうか。

あくまで画家の主體を認め、その作品の眞の意味に近づいていきたいという視点を重視したいのです。しかし、客観的研究のためには様々な努力が必要です。

そもそもまず絵画作品そのものが、その画家のものとして本物かどうかというところから同定が必要です。落款印章の照合分析研究、作品中に使用された描法技法の解析がポイントとなります。落款印章は時代によって微妙に変化していくものですが、本物かどうかの同定には豊富なデータが必要ですし、落款印章が経年変化していた場合、変化に内在する理由、つまり必然性がなければなりません。こうしてまずその作品を研究対象として良いかどうかという選定をし



ボストン美術館における応孝龍虎図の調査風景。作品調査は共同研究者で描法解析研究を担当している妻と一緒にいる。現実には存在していない龍が、応孝の筆によって写実的に表現されている



ては学術研究の方向性も研究の精度も、勿論結果も随分変わってきます。いわば心的態度は学問という海の羅針盤といえるでしょう。ピュアーな気持ちで研究に取り組むことを常に心がけています。そうすることに よって、絵に打ち込んできた画家たちのピュアーな気持ち、精神を汲み取ることができると考えているからです。

研究対象とした円山応挙についていえば、一輪の花の雌しべの一本に至るまで、命あるものへの慈しみの心に満ちた視線を感じます。それでこそ写生画を生み出せたわけで、応挙のこうした心的態度があつてこそ、応挙の写生の精神は広く浸透し、今では小学生でも絵を描くときには写生をするまでに至っています。

良い作品が生まれるときは社会的に充実していると、美術研究ができ、そ

れが社会から関心をもたれるということは、社会が平和なときにしか存在しません。そう考えると、私の研究分野が成立するということは、平和度のバロメータでもあると思います。戦争になったら美術、美術史どころではありませんから。(K)

苦しい過程があることが研究の醍醐味であるかもしれません。

美術史と平和度の相互関係

佐々木 私は、学問は能力より学問に対する心的態度が重要だと考えています。心的態度の設定如何によつ

との手紙のやりとりや作品の制作にまつわる文字資料の解析を行なったり、描具や絵画材料、描法技法の解析も必要となります。苦しい根気のいる作業ですが、こうした困難や障害を乗り越え解明できたときに喜びを感じます。ある意味で、こうした

ます。ここまででも大変な行程ですが、これをすませてやつと研究に入れるわけです。その上で先にお話しした研究方法をとるわけです。

発想を柔軟にしておかないとなかなか良い研究はできませんし、一方で、作品成立の裏付けを取るために依頼主

写生の中で正写といわれる完成画。整理された線が美しい。応挙の作ったこの流れは、現代日本画壇でも受け継がれている
円山応挙筆「写生帖」(佐々木丞平編著『応挙写生画集』講談社、1981年)より転載

志田正雄

防災研究所穂高砂防観測所
文部科学技官

穂高砂防観測所は、活火山焼岳（二四五メートル）を源流とする足洗谷の下流ヒル谷での観測を目的に、一九六七（昭和四十二）年に設置された。飛騨の高山からバスで一時間半弱、新穂高温泉の手前の中尾に位置し、国土地理院の五万分の一地形図「上高地」には「京大砂防観測所」と記されている。所在地は岐阜県吉城郡上宝村中尾、標高は一一八〇メートル、焼岳の西側にあり、焼岳の東側は上高地である。

土石流の発生を予知する

志田さんに観測の目的を聞くと、「雨や水による地すべり、山崩れ、土石流などの土砂災害や土砂の移動による河川環境の悪化を未然に防ぐことです」。

観測の内容についてお聞きする。「まず、通年の観測として、水質調査があります。平湯川、高原川の二十カ所で、一週間に一回、採水しています。二番目に流砂量の計測と堆積土砂の調査です。冬は休みますが、裸地

1951(昭和26)年に附置された
防災研究所は現在、5大研究部門、
5研究センター制の組織となっている。
そのうちのひとつ、災害観測実験研究センター
は全国に6の観測所・実験所を有している。
岐阜県上宝村の穂高砂防観測所に
志田文部科学技官を訪ねた。



斜面で二平方メートルあたり土砂がどれだけたまったかを計測し、土砂特性について調査します。これは十カ所でおこなっています。降雨で土砂の量がふえると、調査用の土砂を運ぶのがたいへんです。また、土石流出

ヒル谷に設置された計測器(円内)。水路の上に、水量を計る超音波水計。ななめ上に、流れの速さをみる流速計、後方の土手には、水路全体の様子を見るカメラが据えられている

の調査では、一メートルおきに十本、長さ約三十センチの鉄の棒を二十センチほど埋め込み、土砂の移動を調べたりします。降雪のため、冬は記録の整理と分析が主になります。」

豪雨になると、ヒル谷の観測用堰堤で三十分おきに水量計測、採水をおこなうそうだ。交代しながら、三日間つづけたこともあったという。土石流の発生について、志田さんは「(土砂が)ぬけてくる」という表現をする。雨が降り続いて、地面が飽和状態になっていくときに、数時間くらいまとまった降雨があるときに危ないそうだ。土石流発生の読みがあたつたときは、やはり「嬉しい」ものがあるという。

地元を知りつくした人

じつは、志田さんは上宝村育ちである。上宝村の東部は温泉と観光、役場のある西部は、土建業、農業、林業で生計をたっている。一九一五(大正四)年、焼岳が爆発して東側の上高地に大正池ができる。一九六二(昭



和三十七)年にも爆発するが、そのときは「ゴウウという音が聞こえ、小学校の校庭からは赤い火花が見えた」という。

このあたりの沢という沢の状況を熟知している。クマやカモシカに出会うこともあるそうだ。「僕はアレルギーでハチがだめなんです。刺されると二十分以内に点滴をうたないとだめなんで、それがちよつと困ります」。

「砂防ダムを造るのはいいのですが、たまった土砂や石をちゃんと取り除いたり、溪流環境を

考えた維持管理も必要です」。

防災研究所は、日本における自然災害を包括的に研究し、最近では、災害に強い社会システムの構築も視野に入れた研究を進めてきた。そうした姿勢が評価され、一九九七(平成九)年四月にはCOE(卓越した研究拠点——センター・オブ・エクセレンス)として認められた。

その研究推進の基礎には、志田さんたちの、地味で息の長い、正確な観測データがあることを忘れるわけにはいかない。(K)

■しだ まさお
1967年 高山西高等学校卒業
京都大学防災研究所
附属穂高砂防観測所
技術職員
2001年 同研究所技術室観測
班観測第一掛主任

能楽の奥深さが やっと分かってきました

山下正恵

■ やましたまさえ
 法学部3回生
 京都大学能楽部宝生会部長
 広島市出身

京

都大学の能楽部は流派別
 に三つの能の会と一つの
 狂言の会があり、私が所属して
 いるのは宝生会といって宝生流
 の能をお稽古する会です。四団
 体が共同で部室を使っており、
 全部で六十〜七十人の部員がい
 ると思うのですが、宝生会はわ
 ずか九人という小所帯なんです。
 でも、五十年近くになる伝
 統的な会で、先輩方もたくさん
 いらつしやいます。

「なぜ、能楽なの」とよく訊か
 れるのですが、私は広島出身
 で、京都の大学に来たからには
 日本の伝統文化に触れてみたい
 という気持ちが強かったのだ
 です。でも、はつきりいって、華
 道でも書道でも何でもよかつた
 んです(笑)。それまで能は全
 く見たことがなかったのです
 が、教室に置いてあった勧誘の
 チラシを見て何となく心惹か
 れ、すぐに入部を決めました。

日々の部活動は、能の中のハ
 イライトシーンだけを切り取っ
 てシテ(＝主役)が囃子・装束
 なしに一人で舞う「仕舞」とい

う略式の舞があるんですが、そ
 れと謡の稽古を中心におこな
 います。週二回、四時半から遅い
 ときは十時、十一時まで稽古し
 ます。年に四回、大きな発表会
 があるので、それに向けて練習
 している感じです。

三年生が私一人だけなので、
 去年の十一月から部長をやらせ
 てもらっています。この三年間
 で学んだことは、礼儀作法や責
 任感の大切さなどはもちろん、
 能というのは本当に奥が深いと
 いうことです。例えば、能の所
 作は型といつて、一定の決まった
 しぐさなのですが、少しずつで
 すけど、情景を思い浮かべて表
 現することができるようになっ
 てきました。決まらないうるし
 ぐさに、創造性が発揮できるとい
 うのはとても面白いと思います。



が面白いし、魅力的だと思います。
 扇でものを指すことを「サ
 シ」というのですが、これがい
 ろんな曲に出てきて、指してい
 る内容が違います。山だつたり
 川だつたり、時には花だつたり
 するのですが、型はともシン
 プルなのに、山なら山、花なら
 花を指していることが観客に分
 かる。昔からの型を踏襲してい
 るだけなのですが、精神的に内
 側からその雰囲気や状況をつ
 けていくという感じなんです。最
 終的には、観客にも指しているも
 のが見えるというのが名人の境
 地なんでしょうね。

六月の十五日と十六日に名古屋
 屋であった全国宝生流学生能楽
 連盟の発表会では、「清経キリ」
 を舞いました。それまでは練習
 してきたことを舞台上で緊張し
 てやるだけだったのが、今回は
 清経という役柄にひたれたとい
 う実感が持てて、とても嬉しか
 ったですね。(H)

輝きは動から

授業は とても刺激的です

大西良浩

■ おおにしよしひろ
 大学院医学研究科
 社会健康医学系専攻理論疫学
 大阪市出身

私

は京大薬学部卒業後、画
 像診断薬専門の製薬メー
 カーに就職し、それ以来二十年
 近くほとんど同じ仕事をしてき
 ました。だからどうしても、物
 の見方が「薬屋」の色眼鏡で見
 ているところがあります。それ
 で、入社して数年経った頃から、
 もっと広く社会の側から医療や
 健康の問題を考える必要があ
 る、と感じていました。

「さてしかし、どうしたものか」
 と思っていたところに、京大の
 大学院に「社会における人間の
 健康」をテーマにした自分の問
 題意識にぴったり
 の専攻があるのを
 発見したんです
 (笑)。カリキュ
 ムを見てみると、
 私の知りたいこと
 がぜんぶ揃ってい
 るように思いまし
 た。それで、会社
 の上司に相談した
 ら、「行つて来い」
 ということになっ
 たのです。



いま学生数は一学年二十六人
 で、学部卒と社会人卒の人が
 半々です。社会人の中には医療
 系や看護系、薬学系の人たちば
 かりではなく、意外に人文系の
 方も多いですね。マスコミや教
 育関係の方たちもおられます。
 現役の学生とは二十歳近くも年
 が離れていますが、全く違和感
 がありませんし、彼らとコンパ
 をしたり飲みに行ったりするの
 も楽しい。

先生がたの授業は本当に熱心
 です。先生に知識や技能を身
 に付けさせることに対する熱意
 と工夫を感じます。だから、学
 生としては真面目に授業に取り
 組んだらけっこうハードです
 (笑)。授業が行なわれている科
 目をぜんぶ取ると、十六ぐらい
 になると思うんですが、興味あ
 るものが多く、あれもこれも取
 りたいという気持ちになりま
 す。前期分のテキストや資料だ
 けで、本棚一段分ぐらいいは優
 にあります。授業のしかたも昔と
 は違います。

例えば、臨床疫学 (Evidence
 Based Medicine) のワークショ
 ップでは、丸々一日使って、患
 者のケアについての意志決定の
 現場で、現在ある最良の根拠
 (evidence) を用いるノウハウ
 を習得させてもらいました。課
 題を与えられ、グループ討論や
 ロールプレイなどの手法を使っ
 て結論を導き出し、最後はグル
 ープごとの発表がありました。

この授業はとっても刺激的で、医
 療現場も相当考え方が変わって
 きていることを実感しました。

終わつたあとに授業評価とい
 うのがありますが、評価して
 みると、どの授業もものすごく
 評価が高くなつてしまひ、高く
 付け過ぎたかなと思つたぐらい
 です。先生方は非常によく分か
 るように説明してくださいます
 し、皆さんとても授業がお上手
 だと思います。昔の先生方は板
 書なさつていましたが、今は皆
 さんパワーポイントで作成した
 資料をプロジェクトで映すと
 いうスタイルです。私の場合、
 仕事をしながら大学に通ってい
 るので時間が不足気味ですが、
 学校と会社の方々、それに家族
 にも助けてもらっています。来
 年には課題研究で支援ににあた
 っていると思っています。(H)

その樹は、農学部グラウンドの北西角にスツクと立ち、大文字山と対峙していた。幹周り二メートル七〇センチ、樹高は二〇メートルもある大木だ。一般的には、ドイツガシワとかヨーロッパナラと呼ばれるブナ科ナラ属の樹木である。葉は日本の柏とよく似ているが、サイズはすこし小さい。ドイツなど北ヨーロッパに多い樹種で、あちらの森ではごく一般的な種類であるという。

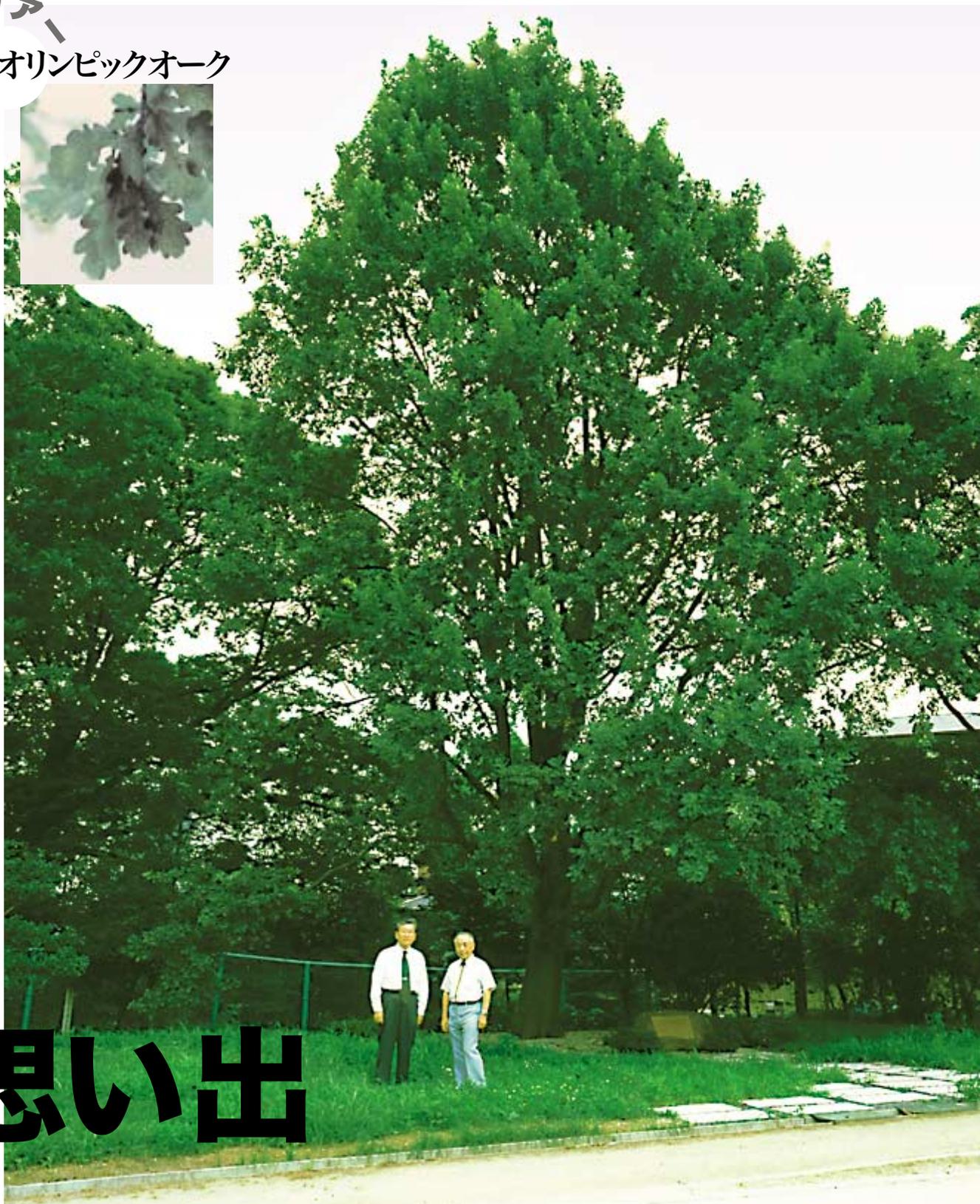
メダルとともに与えられた 苗木の意味

この樹の苗木がドイツのベルリンから日本に渡ってきたのは今から六十六年前、一九三六（昭和十二年）のことである。持ち帰ったのは当時京大を卒業したばかりの田島直人。一九三六年のオリンピック第十一回ベルリン大会における三段跳びの優勝者である。当時の京都大学陸上競技部は、田島ばかりではなく、二位になった原田正夫も含めて多数の優秀な部員を擁し、黄金時代を迎えていた。同じ大学の学生がオリンピックの同一競技において一、二位を独占するのはこのときが最初で、それ以降も、十種競技でカリフォルニア大学の例があるのみだという。

優勝者に勝利の証として金メダルが贈られるのはベルリン大会でも同じだったが、メダルとともにドイツ

アー
ツ
見
大
新
部
京
大
風
線

オリンピックオーク



オリンピックオークの前で、田島先輩をしのぶ近藤公夫先生（右）と松野隆一先生

の思い出

ガシワの苗木も贈られたのである。その意図がどこにあったのか、今となってはよく分からない。しかし、元陸上競技部監督の近藤公夫先生（農学博士）は次のように推察されている。

「あの樹は、特に北ヨーロッパでは森林を代表するような樹種で、しかも非常に長寿でもあり、巨木にも育つということから、生命力と成長のシンボルのようなものなんです。その樹の苗木を優勝した若人に、『さらに伸びよ、さらに栄えよ！』という願いを込めて授け、表彰の一端に加えられたのではないのでしょうか。『森の民ゲルマン』という言葉があるように、ドイツ人は森に対する強い憧れと親近感があります。その森の中でも最も代表的な樹は、まさにドイツの風土をシンボライズするものから、ベルリンで行なわれたオリンピックの名残として、世界中の優秀な若者たちに持ち帰って育てて欲しい、という思い入れがあったのだと思います。」

近藤先生は一九五三（昭和二十八）年の卒業で、「三高」最後の入学生であり、新制大学の第一回卒業生でもある。また、もう一人お話を伺った松野隆一農学部長は昭和三十七年の卒業で、お二人は陸上競技部の先輩と後輩の間柄。松野先生が現役の学生時代、近藤先生が陸上競技部監督

だった。二人とも現役時代は長距離の選手だったそうだ。また両先生とも、田島・原田先輩とは部のOB会の蒼穹会などで何度も顔を合わせたことがあるという。

「田島さんは非常に優しい方で、たとえ選手がミスを犯しても、なんとか誉めるところを探す人でした。原田先輩は負傷しても銀メダルをとつた人です。『ファイトが足りないぞ』などと厳しく叱咤激励してくださる方でしたが、私はお二人とも大好きでした」と近藤先生。また松野先生によると、「どちらも陸上競技部にはなくてはならない先輩でした。残念ながら、田島先輩は亡くなられて十三年経ちますし、原田先輩も二年前に鬼籍に入られました」とのこと。

記録どおりの長さの三辺の囲いで顕彰する

話を「樹」に戻そう。

松野先生が現役のころ「人間の背の高さぐらい」だった樹は、大きく育っていった。しかし、樹の成長に反比例して、人びとの心の中の樹は小さくなっていった。京都大学の陸上競技部が最も華やかだった時代のシンボルに「オリンピックオーク」と名前を付け、顕彰する動きが出てきたのはつい最近のことである。

オリンピックオークは何回か危機的な状況に見舞われている。昭和二

十年代の終わりには大型台風の強風に煽られ、近藤先生の目の前でボキッと折れたという。折れ口を見ると、ずいぶん虫に食われていた。折れたあと何本が残った枝の、いちばん強そうなるものを活かし、丹念に育てていった。

しかし、年月を経るにつれてオークの根元まで雑草が茂り、そのままでは木の養分が草に吸い取られてしまうという懸念が出てきた。また、虫に弱い樹種なので、もし悪い虫がつくと枯れてしまうかもしれない。そんな中、蒼穹会が開かれ、「こんな現状ではオリンピックオークの名前が泣く。やはりきちんとあの樹を顕彰すべきだ」という声が上がった。そして二年前、近藤先生を代表とす



オリンピックオークの根元に置かれた顕彰碑

るオリンピックオーク環境整備委員会を結成。去年の四月、田島の優勝記録である六メートル（ホップ）、四メートル六〇（ステップ）、五メートル四〇（ジャンプ）の枕木状の木を三辺（合計一六メートル）に埋め込んで、雑草が生えないように、内側には白川砂を敷き詰めサツキを植え込んだ。

三辺の長さを、田島のオリンピック記録と同じ長さにしたのは、造園学が専門の近藤先生のアイデアだった。ランドスケープ・デザインとして、田島先輩とあの樹の精神をシンボリックに表現したものだという。

田島直人は一九三二（昭和七）年のオリンピック第十回ロサンゼルス大会に初出場し、走幅跳びで六位入賞をはたしている。また、優勝したベルリン大会では走幅跳びでも三位となっている。このときの三段跳びの優勝記録一六メートルは、一九五一（昭和二十六）年にわずか一センチ破られるまで、十五年間も世界最高に輝いた大記録である。その後の京大陸上競技部の選手の中で、この記録を凌駕する者はいない。

一度、オリンピックオークを訪ね、ホップで六メートル跳ぶことがどんなに凄いことか確かめてみてほしい。そして樹に触れ、また樹を見上げ、七十年近く前の京大アスリートの偉業に想いを馳せる寸暇をもつのも悪くないのではないかと。（H）

金メダリスト

弥生人の声が聞こえる



山中一郎
(総合博物館教授)

ところで、総合博物館は月・火曜日と、年末年始の休館日を除いて展示を公開しています。有料なので大変恐縮ですが、ぜひ一度足をお運びいただきたいと思っています。

奈良県唐古弥生式遺跡

ここでは文化史系標本のなかでも、常設展示をしている考古資料のひとつを紹介しましょう。弥生時代の研究に画期的な役割を演じた考古資料です。

一九三七（昭和十二）年に奈良盆地の真ん中に位置する田原本町の唐古池で行なわれた発掘調査で出土しました。報告書が刊行されたのは一九四三年ですから、その五年以上にわたるあいだの、京都大学考古学教室の研究活動を集約する資料です。考古学講座はわが

国の高等教育課程では京都大学だけに置かれていたのですから、唐古遺跡の資料は当時の日本の考古学研究を代表するものと言ってもよいでしょう。一九六六（昭和四十二）年に一括して国の重要文化財に指定されました。

弥生時代の編年

紀元前四世紀から紀元後三世紀までの六百年ほどのあいだの弥生時代は、そのとき使われていた土器の形と、その形別の種類の組み合わせり方によって時期が分けられています。すなわち編年されて

いると言えます。第Ⅰ様式期から第Ⅴ様式期を区別するのですが、その時期細分が決められたのが唐古遺跡の研究の成果でした。この時間的に五段階に分けられる土器は、下から上へと、五段の棚を作つて展示されています。

北九州に認められる土器そのものといえる形を示す第Ⅰ様式、櫛状のものを土器の表面に当てる紋様をつけた第ⅡⅢ様式、幅が広い凹んだ横線を数条巡らせる紋様の第Ⅳ様式、そして粘土紐を巻きあげて叩き締めて土器の本体を作つたあとに、その叩き痕を見事に消し去っている第Ⅴ様式。展示を見ながら、弥生時代の土器の時期別分類を学び、そして西日本を西から東へと弥生文化が流れるように伝わった跡を思い描いて下さい。

水田の米作り技術の伝播

弥生時代はわが国に米作りが始められたときです。水田を拓いて米を作った姿を具体的に思わせる証拠を初めてもたらせたのが、唐古遺跡の調査でした。

木を伐り倒すのに使われた、太くて重量感のある石の斧先は、時代の「先兵」でした。さらに、半月形をして、背をなした弧状縁の側に二つの穴を穿つて、紐で指の間に二つの穴を穿つて、稲の穂首を刈り取った鎌（石庖丁と呼ばれます）は、時代を「象徴」する道具です。他の木工用の石器を含め

京都大学総合博物館が保管する文化史系標本には、教育標本の役割を果たしてきたものから学史を語る史・資料まで、多種多形の、極めて価値の高いものが、三十万点をこえてあります。とくにその保持に神経を注いで、研究の新しい進展に対して常に再検討を試みることができるように努めています。こうした史・資料のうち、その材質が、例えば紙とか、錆が生じた金属など、劣化を強く配慮すべきものは、実物資料としての公開に制限を、残念なことですが、設けざるをえなくなっています。また、とくに学術上の価値が極めて高い史・資料には、それに接するの自身の見識を高めることを求めるのが「国際的通念」になっている類のものがあります。欧米諸国の「常識」をこえて公開することは、多方面からのお考えを聞いたうえで、衆知を集めてののちに始められるべきである、と考えています。

■やまなか いちろう

1968年 京都大学文学部卒業
1970年 フランス・パリ1大学人文学部およびマルセイユ大学理学部留学
1976年 京都大学大学院博士課程（考古学専攻）単位取得。奈良大学文学部専任講師
1984年 京都大学文学部助教授
1995年 文学部教授
1997年 総合博物館教授
専門：先史学

唐古遺跡から出土した絵画土器



編集後記

2002年3月の創刊号に続き、京都大学広報誌『紅萌』（くれないもゆる）の第2号をお届けします。この広報誌によって、「京都大学の現在」の姿をみなさまにお伝えできればと願っています。また、発刊に際し、快く原稿の執筆や取材に応じて下さった方々に感謝の意を表します。

編集に携わり、各部局の長い歴史における秘話、逸話に触れることも喜びの一つです。編集は学内の発見ツアーのようなものです。これからも学内者も知らなかった面白い発見記事も積極的に載せていきたいと考えています。

なお、広報誌の誌名が『紅萌』（くれないもゆる）となった謂れについては、創刊号22頁の「創刊の辞」に詳しく説明しましたが、この第2号が初見となる方のために再度概説します。この誌名『紅萌』は、旧第三高等学校逍遙歌の歌詞に由来しています。京都大学の新生の誰もがまず初めに学ぶ歌が、この澤村胡夷作詞・作曲の「紅萌ゆる丘の花」なのです。早春の緑の中で大きく開かんとする紅い花の蕾が吉田山を彩る光景を謳うこの歌は、京都大学を象徴するに相応しく、広報誌の誌名に採用するに至りました。

2002年9月
広報委員会国内向け広報誌編集専門部会

京都大学広報誌 **紅萌** — 第2号

2002(平成14)年9月25日発行

編集・京都大学広報委員会
国内向け広報誌編集専門部会

編集協力・都市出版株式会社（木村滋）

発行・京都大学情報推進部大学情報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-2073
FAX 075-753-2094
URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/>
E-mail kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

印刷・凸版印刷株式会社



て、それらの用具は弥生時代に大陸からもたらされたものなのです。唐古池は湿地帯でした。木製の道具が運良く残ってくれていました。杵や鋤先などの農耕具が初期の米作りの姿を教えます。また、糸を紡ぐのに用いられた中央に穴をあけた円板（紡錘車と呼ばれます）も、当時の人々が衣類を着たことを教えてくれています。同時に出土したシカやイノシシの骨は、米作りを始めていたとはいえ、野生動物も食べられていたことを示します。その後日本人の食生活のなかで獣類を素材にする食物が少なくなることは様相が異なっています。

最後に唐古遺跡出土品のなかで特筆すべきものに触れておきます。いくらかの土器に描かれた絵画です。土器が乾ききらない段階で表面にへらなどの先の尖ったもので刻み込む線や描かれています。展示している土器には、片側に四本の権が表現されています。反対側にも四本の権があったはずですから、その舟は相当大きなものでした。学生時代のわたしは、そのような大きな舟が弥生時代に本当にあったものかと、大いに疑問に思ったものです。その後発掘調査が盛んに行なわれるようになって、果たしてそのような大きな舟が、その舳先の部分だけですが、残っていたのが発見されました。復原された舟で大阪湾から韓国の釜山まで実際に漕いで渡る試みまでなされています。

唐古遺跡の出土品は多種多様です。それらを作り、使った人々の姿を遺物に重ね合わせて見ようとすると、弥生時代の豊かなメッセーヂが聞こえてくるというものです。

受験生のためのオープンキャンパスを実施

8月8日(木)、9日(金)の両日、全学部が参加した本学では初めてのオープンキャンパスを開催し、全国各地から約4000人の参加者があった。

このオープンキャンパスは、受験生に京都大学をよりよく理解してもらうために企画されたもので、両日とも、午前中は総合体育館で全体説明会を実施、8日午後は文系学部(総合人間、文、教育、法、経済)、9日午後は理系学部(理、医、薬、工、農)の各学部に分かれて模擬授業や研究室訪問などが行われた。



平成15年度新組織の設置構想

基礎化学研究センター

福井謙一博士がノーベル化学賞を受賞されたことを記念して設立された財団法人基礎化学研究所が京都大学に寄附移管されたことを受けて、同博士の研究理念を継承し、化学の将来を見据え時代の変移に柔軟かつ的確に対応でき、理論・実験及び産・官・学の融合を推進する新たな研究環境、研究体制を持つ全学施設として「基礎化学研究センター」を設置する。

フィールド科学教育研究センター

人間活動と自然生態系との調和、地球生物圏の共生システムの解明を研究科・専攻などの枠組みを越えて研究し、現場をベースにした異分野の融合による新たなフ

ィールド環境学の研究拠点として、学内附属施設(理学研究科附属瀬戸臨海実験所、農学研究科附属水産実験所、同附属亜熱帯植物実験所、同附属演習林)等を廃止・転換して「フィールド科学教育研究センター」を設置する。

京都大学における全学共通教育の改革構想

新しい時代が要請する指導的な人材を養成するには、共通教育・教養教育を質的に強化することが必要であり、このためには、教育課程の改善とともに、その実施・運営体制の抜本的な改革が求められる。

本学では、共通教育・教養教育の目的を明確化し、基礎教育の再構築、外国語教育の質的改善、教養教育の充実、学生の勉学意欲を高める教育環境の活性化を図るため、全学共通教育を全学的な立場から企画・運営する責任組織として、新たに「高等教育研究開発推進機構」を平成15年4月に設置する。「機構」は、副学長のリーダーシップのもとに、強固な執行体制を確立し、全学教育委員会、全学共通教育システム委員会等により、共通教育の必要な改善と円滑な運営に責任を持つものとする。また、高等教育教授システム、共通教育企画・開発等の研究を基礎に「機構」における企画・運営・評価を支援する専門的組織として、高等教育教授システム開発センターを転換し、「高等教育研究開発推進センター」を置く。さらに、全学共通教育の目的・目標に則って適切な運営が行われているかを検証・評価するため、「機構」の外に全学共通教育評価委員会を設置する。

なお、これらの設置準備を進めるために、「機構」設置準備事務局を本年8月に開設したところである。

